

厳冬期シベリア鉄道に行く

JAPAN NOW 観光情報協会

理事 近藤 節夫

昨年暮れシベリア鉄道が、全線電化された。早速ロシア大陸全長 9,258km を横断してみようと、敢えて豪雪期に挑戦してみた。シベリアを知るには、その本来の姿が分る雪深い季節に訪れるに限る。途中イルクーツクに1泊しながら、始発ウラジオストック駅から執着駅モスクワまで、いまだき車内で6泊もする世界一長〜い鉄道の旅に出かけた。

各コンパートメント車両には専属の二人の女性車掌がいて、トイレや車内通路の掃除から、湯沸し、暖房作業まで黙々と立ち働いていた。車内の気温は、大体 30℃前後を表示していて下着一枚か、精々シャツ一枚の重ね着で充分で、暖房はデッキにあるかまどを使った石炭だった。電化されたとは言え、暖房だけは電気系統を避ける。万が一にも停電したら、一晩のうちに乗客が一人残らず凍死してしまうという嘘のような話も聞いた。

最大の難問は、「ことば」だった。ロシア語とボディランゲージ以外まるで歯が立たない。国際列車と銘打ちながら駅名や、車内の表示もすべてキリル文字で書かれ、これほど外国人旅行者に気を遣わない乗り物も珍しい。だが、何とか身振り手振りで意思を伝えようとする私には、救いはたっぷりある時間と親切なロシア人気質だった。食堂車でロシア名物‘ボルシチ’に舌鼓を打ちながら、気のいいロシアの人たちと日露国際交流を演出した。

線路に沿い1km ごとに建てられたキロポストがモスクワからの距離を表示しているが、同じキロポストのモスクワ側よりシベリア側の表示が1km 多いことが不思議だった。聞けば些細なことのようなのだが、これは吹雪などで路に迷った場合、小さい数字がモスクワ方面を指しているとの取り決めで工事や、保守管理にかかわる安全のための知恵が施されている。

やや単調な旅の連続だったが、行商人や地元の人たちとのもどかしい会話や、やりとりが思いのほか愉快だった。それでも一度だけ度肝を抜かれたことがあった。油田の町・チュメニに停車した時のことである。数人の乗客がプラットフォームから駅舎へ買い物に行っている間に何の前触れもなく長い旅客列車がその狭間に停車してしまった。発車時間が迫り駅舎側に分け隔てられ、慌てた乗客が突如客車の下へ潜り込み、決定的に這って通り抜けたのである。もし列車が動き出したらと思うと、ぞっとする情景だった。

車窓には、雪原と白樺林が厭きることなく連綿と続き、母なるヴォルガ川を渡り、ヨーロッパとアジアの分水嶺であるウラル山脈を越え、長躯地球を四分の一の周したにも拘わらず、呆れたことに外の景色はほとんど変わらない。ロシア大陸の広大さにはただ唾然とし、人間の小さな存在と無力感を感じるばかりだった。

しかし、反面ありあまる時間に倦怠感を感じながらも、心ゆたかに過ごした厳冬のシベ

リア鉄道の旅こそは、慌ただしい現代世相の中で、「本物の旅」だと実感させてくれたのである。実際終着駅のモスクワ駅に降り立ったとき、これまでの旅で感じた満足感や充実感とは、確かに一味も二味も違っていた。